

UFO批評 by J・N 第59号

(2003年 3月/Mar.)

発行・沼川淳治/東京都 世田谷区 祖師谷 3丁目 (以下省略。封筒に表示)

1993年 4月創刊 禁・無断転載 © 2003 by Junji Numakawa

本誌は私見を発表するための場であり、ニュース紹介は余談にすぎないのだけれど、英文版を刊行するようになってから海外情報がそれなりに手元に集まっている。国内UFO誌で伝えられていない話も少なくない。そこで本号では、アイルランド、英国、スウェーデン、米国、ポーランドよりいただいた刊行物などから、昨年のお話を中心に御紹介する。以下、団体名等のアルファベット順。――

* * *

■AFU (「UFO研究のための保存館財団」。スウェーデン。本誌No.56参照)
 : ★Anders Liljegen 氏が編集する英文の「AFUニューズレター」は季刊であるが、昨年は氏のパソコンがウィルスに感染したため予定の3月に刊行できず、6月号(43号)が最初で、かつ4ページ止まりとなった(通常8ページ程)。★同号は、「この夏からAFUは、同じ通りに沿って3つの保存館を運営することになる」と告げる。すなわち、1993年から開設されている74㎡の「A」館、新設される62㎡の「B」館、さらに30㎡の「C」館である。荒井先生の「UFOライブラリー」は約50㎡だった(「UFOこそわがロマン」P.87)から、かなりの規模だ。「ここは、この遊星で最も広範、かつ最もよく組織されたUFO保存館に違いありません!」――とティモシー・グッド氏がAFUの来客帳に書いたのは、2001年6月号(40号)によれば、1998年のことだった。★AFUへは本誌・英文版No.3を昨年10月25日に発送したけれど、12月6日、AFU副議長にして「UFOスウェーデン」議長、NARCAP「国際顧問」にも名を連ねる Clas Svahn 氏(1958年4月生まれ)より手紙が届く。荒井先生や池田氏のコレクションがどうなったのか心配しておられたため、飯野町「UFOふれあい館」のリーフレットを2点カラーコピーして1月27日にお送りしたところ、折り返しUFOスウェーデンの雑誌「UFO aktuell」 「UFO RADEN」が1冊ずつ送られて来た。カラー・ページを含む高級印刷による前者は、表紙から数えて裏表紙で32ページ。驚いたことに、私の英文版を出典として荒井先生と池田氏の逝去が、御二人の写真とともに報じられていた。「Nr 4/2002」とあるから、昨年の第4号らしい。いっぽう後者は、ホッチキスで綴じたコピー印刷らしきもの(表紙から数えて裏表紙で22ページ)ながら図版多数。★「AFUニューズレター」9月号(44号)は、全8ページの半分がゴースト・ロケット情報で、ストックホルムの「軍事保存館」から、1946年8月14日に起きた2つの目撃例に関する文書を計3点転載している。また同号によれば、2001年にUFOスウェーデンの「報告センター」は164件の報告を受け取ったが、そのうち同年中の目撃は93件。2002年初期の段階で同センターが「本物の『UFO』」と判断しているのは1件(同年中の目撃についてだけの話なのか不明。以下同じ)であるが、説明されていない36件を調査中。24件は「一定の説明」が与えられた。そして「少なくとも13件は、人気ある輸入おもちゃ風船『UFO風船』の報告だった」(これも、先の24件に含まれているのか否か不明)。同センターに寄せられた報告は、最終的にAFUで保存

される。★2001年9月号(41号)には、「アンダースタンディング」と、AFU保存館の初期の歴史に関するいくつかの覚書」と題する記事あり。初期スウェーデンUFO界は、CBAとも交流があったEdith Nicolaisen 女史(1986年没)を通じて、ダニエル・W・フライ(1992年没)の大きな影響を受けたようだ。1964年には、「アンダースタンディング」のスウェーデン語版さえ企てられる(ただし、「我々が知る限り、3号しか」出なかった)。AFUの前身も、「アンダースタンディング」愛読者Kjell Jonsson氏(1986年に34歳で没)の「小さなアパート」から発したのであり、UFOスウェーデンは、「とりわけ1990年代に、そしてClas Svahn議長のもと、より真面目かつ客観的な研究へ向かって組織が円熟するまで、初期の頃は本質的に1つのニューエイジ・グループだった」。

*

■IRAAP(「変則現象独立研究者協会」。米国。本誌No.56、57参照)：★隔月刊「メッセンジャー」は、私の英文版から既に3回も転載してくれている(もちろん、英語があちこち修正されて)。すなわち、ニアミス事件、瀬戸内海事件、特異日説批判、である。12ページから成る同誌は、内外の超常ニュースをインターネットや出版物から紹介するとともに、会員の研究なども掲載。アメリカ東部の雰囲気と言うべきか、上品な印象を与える紙面だ。★本年早々に届いた12月号は、地元オールバニ国際空港(ニューヨーク州)で10月20日、FOX-23テレビのビデオ・カメラに偶然写った4枚翼の細長い飛行物体に関する記事が1/3以上を占める。「ムー」1月号の報じていた事件で、IRAAPも同テレビから取材を受けた。このビデオについて私は、組織統轄者にして編者のレイモンド・W・セコット氏(Raymond W. Cecot)より11月5日、既に詳しい資料をいただいている。すなわち、4枚のカラー静止画像が掲載されたFOX-23のウェブ画面1ページと、それからピーター・デヴンポート氏(「全国UFO報告センター」所長)によるウェブ記事7ページだ。後者はブライアン・ハフ氏が「物体は雲の向う側にある、とも述べた」と報じており、12月号によれば、IRAAPメンバーを含む別の鑑定者たちも同じ判断を下している。しかし私は、FOX-23が掲載した画面とハフ氏が示す画面とでは、翼から機首までの長さが大きく違っているように見えることに気づいた。シャッター・スピードより速く動いた被写体は、長く伸びた姿となるであろう。それが虫である場合、シャッターが開いている間に2回はばたけば、4枚の翼となって画像に記録されるであろう。雲の背後にいるように見えたのは、雲の明るさが、この淡い被写体を圧倒してしまったためではないだろうか?— 以上の私見をCecot氏へ、2つの手紙でお伝えした。★UFOに関する「メッセンジャー」のインターネット情報源として目につくのは、ジョウゼフ・トレイナー氏編「UFOラウンド・アップ」だ。10月号と12月号は同サイトから、UFOに殺人の嫌疑がかけられた事件を紹介。すなわち、ペンシルヴェニア州で8月2日早朝、モンタウア・リッジという山の麓に住むトッド・スーズ氏(Todd Sees: 39歳)が同山へ入り、予定時刻を過ぎても帰宅しないため捜索が行われた。彼は自宅裏の、送電線に沿った小道を4輪自動車で行って行ったのだったが、車は山頂で送電線の近くに発見される。しかし犬たちは、車のまわりに彼の臭いを嗅ぎ出せない。翌日おそく、彼の遺体が、自宅から2~300メートルにある池の近くで発見されたけれど、なぜか下着姿だった。しかも遺体は、夏なのにふくらんでおらず、やつれていた。そして「或る農場の3人の農民が言うには、トッドが行方不明だったとき、あの送電線の真上に『大きな、実に明るい物体』を彼らは見た。このUFOは無音だった。10分から15分ぐらいの間、動かなかった。突然上昇し・・・そして突然停止した。1つの明るい光が下へ輝き、何かが、その光へと引き抜かれた。このUFOはそれから、まっすぐ上昇し、再び

ためらい、そしてサスケハナ川を越えて西へ向かい、視界から去った」。10月号は「先週『長靴1個が、あの4輪自動車から1マイル〔1.6 km〕にある樹木のとっぺんで発見された』」と伝え、トレイナー氏はこれを「トッドの長靴」としていた。けれども12月号では、トッド氏のかどうか「報道はない」となっており、また「最新情報」として、警察が「トッド・スィーズはコカインの過剰摂取で死亡した、と発表した」ことを伝えている。発光体出現が事実とすれば、球電の一種だった可能性もあろう。落雷にあった人間の衣類は、脱げることがあったと記憶する。ちなみにラウンド・アップの第一報は、デヴンポート氏からの情報に基づく。★7月26日に首都ワシントンで2機のF-16が未確認機を追ったというスティーヴ・ヴォウジェル氏のウェブ情報(天宮清氏の最新号を参照)は、8月号で紹介されていた。しかし、夏に米国各地でUFO騒ぎがあったことは、天宮氏の記事で初めて知る。10月号は、「球型の光たちと円筒形型の宇宙船(craft:単複同形)が、リッチモンド〔首都の南150km〕とヴァージニア・ビーチ間のI-64〔道路の番号だろう〕上空で、この数週間(〔IRAAP注:〕2002年6月から7月)報告されている」と『MUFONジャーナル』(原文のママ)7月号から紹介。「ヴァージニア・ビーチ地域の或る目撃者は、1つのUFOが彼の近くに着陸するのを見たと言っている」。「V・スミスは報告した、『私の会社の或る運転手が、約3時間の時間喪失談を主張している。[...]この時間喪失の間、彼のトラックは道路の真ん中に3時間駐車していたが、誰もそのトラックを見なかった。なのに衛星追跡報告は、トラックがそこに位置しており、3時間後に動き出したことを示している』」。★6月号P.7は、私の英文版No.2から特異日説批判を転載してくれているが、デズモンド・レズリー氏の逝去が言及されているためであろう、ページの残り部分に『アイリッシュ・タイムズ』からインターネット経由で氏の訃報を転載。そこには、「George Stransky(実際には、ジョージ・アダムスキ)」という初耳の情報が含まれている。

*

■MUFON・オハイオ州(米国。本誌No.57参照): ★州代表ウィリアム・E・ジョーンズ氏(William E. Jones)へは、必要なものはないかという御言葉に甘え、無理を承知でアーノルド事件、ロサンゼルス事件、ワシントン事件に関する資料をお願いした。送られて来たのは『IUR』に連載されたブルース・S・マカビー博士のアーノルドに関する論文だけであったけれど、そこには『円盤の来訪』の記述も抜粋されており非常に便利。★『オハイオUFOノートブック』が昨年も刊行されたのかどうか、現時点では知らない。第19-20号(1999年。本文40ページ。当時の出版元はMORA)に載っているジュニー・ザイドマン氏(Jennie Zeidman)の『J・アレン・ハイネック — 「ロケット屋(A 'Rocket Man')」』は言う。「ハイネックによれば、彼のUFO顧問という地位は、純粹に、たまたま与えられたものであった。おや正確ではない。実際、全く正確ではない。[...]彼は実際には、論理的かつ当然に選ばれたのだ。なぜなら、ハイネックはロケット屋であった。[...]ハイネックは、ニュー・メキシコ州のホワイト・サンズ試験場で進行中のV2号ロケット事業に携わっていた。彼は、このことを学生たちに言わなかった」。ザイドマン氏は「1952年秋、彼の『天文学500』クラスの学生だった」1人で、その後も交流があった。★第22号(2001年。本文34ページ)は、「トルコの独立UFO研究者」Sefer Murat Aksoy氏の論文を3篇収める。『古いUSO〔未確認海中物体〕現象』『トルコにおける驚くべきUSO遭遇:水中UFO写真とされるもの』『トルコからの1件の奇妙なUFO目撃』であるが、『古い...』には「the kappa」や「the Lanterns of Dragons」(竜灯のことだろう)が他の著者たちから引用されており、前者が「暮らしていた」「大きな貝殻」は「空へ飛んで行った」(???)...

■SUF OG (「サウサンプトンUFOグループ」。英国。本誌No.56参照) :

★「サウサンプトンUFOグループ」誌 (『SUF OG』改題) は隔月刊で20ページ。議長スティーヴ・ジェラード氏 (Steve Gerrard) が、11-12月号 (145-146号) で私の英文版No.3を、「ジュンジの英語は完全でない (not good) けれど、この逸品は一読の価値が十分ある」と評して下さっている。そして、荒井先生と池田氏の逝去、および天宮氏のアダムズ山写真 (レニエ山となっている) などに言及。★このグループは、ラジオやテレビにたびたび出演したり、「スカイ・ウォッチ」と称する“UFO出現待ち”を精力的に実施。また、地元におけるUFOの動きを漏らさず把握したいという情熱まで有しており、5-6月号で Gerrard 氏は、自宅から8kmほどで起きた目撃を『UFOマガジン』(英国の) が教えてくれなかったこと、32km先に住む目撃者が、300km離れたリーズ市における国際UFO会議 (毎年開催。昨年9月に21回目) で、しかもSUF OGが来ていたのにメキシコの研究者へ通報したこと、更に、同じ地域で同じころ撮られたビデオが、これまたデンマークの研究者へ通報されてしまったことを嘆く。★11-12月号が転載する 11月28日付「サウサンプトン・イヴニング・エコウ」紙によれば、『European Journal of UFO and Abduction Studies』に編集主幹クレイグ・ロバーツ氏 (Craig Roberts) の書いたリポートが、2002年「Cuadernos De Ufologia」賞を獲得した。これはスペインの変則財団が授与する (本誌No.55参照) 「ヨーロッパ最高の賞の1つ」。Roberts氏は、サウサンプトン市にあるトットン大学 (Totton College) の心理学指導教員 (tutor) で、氏「による2年間のUFO研究課程は、学生たちがETを研究できる、この国でただ1つの定評あるA級授業」(以上、引用は「エコウ」紙より)。Gerrard氏や書記スティーヴ・ライダー氏 (Steve Rider) も同大「UFO課程」で、それぞれ「座長」「教師」を務めたことなどがある (2001年9-10月号掲載の活動年表)。

★広報担当アーニー・シアーズ氏 (Ernie Sears) は、後述するビデオで拝見するとかなりの御高齢らしいが、一般新聞やUFO誌やらを雑談口調で論評する2つの常設コーナーを執筆。注目されるのは、多数の内外UFO誌が登場するにもかかわらず「FSR」が一度も対象になっていない点。米国についても、MUFONやCUFOSの会誌が出て来ない。★Sears氏は、1950年代にBFSSB (英国空飛ぶ円盤局) の会員だった (7-8月号、P.12)。その解散が2001年の話題の1つとなった (「高次元」同年5月号も報ず) 同団体は、アルバート・K・ベンダーの例のIFSSBの、英国支部として誕生した同国「最古のUFOグループ」であるが (2001年5-6月号)、それなりに海外UFO団体の顔ぶれを知っていた少年時代の私の記憶にも見当たらず。★Gerrard氏からは5月に『SUF OG VIDEO TAPE』と題するVHSテープをいただいたが、手違いによりPAL方式のままダビングされていたため、写真店で9月にNTSC方式へ変換するまで拝見できなかった。2時間 (と手紙に記されていたので、それぐらいしか変換していない) にわたるこのビデオには、幹部諸氏の登場するテレビ番組やミステリー・サークル (サウサンプトンが属するハンブシャーは、サークル集中地域の1つ)、そして彼らが撮影した発光体の映像の数々が収められている。最も印象的なのは、星座のように並んだ光点群。12月初め、やっと発光体映像 (約25分) をそれなりに鑑賞する時間が持てた。その報告と併せ、パンタ氏著「ミステリーサークル・真実の最終解答」を、簡単な英文解説とともにお送りした。礼状によれば、ビリー・ベイリーという名は御存じない由。ちなみにSUF OGはドイツ、北欧、そして日本を含む内外UFO関連の膨大なビデオを収集しており、そのリストが、アイルランドの『UPRIニューズレター』誌 (後述) で何度か紹介されている。日本の事件も時折り見出され、「カナザンナ」(1988年) は金沢の菱形光 (1989年) であろうが、「Micako Jesino」は沖縄の宮古島 (Miyako

Jima: Miyako Island, Okinawa Prefecture) か? 1957年1月23日に「天文学者たちによって撮影された」「フィルム」との事だけれど、思い当たるもの無し。★7-8月号所収『神秘的な球体たち、2001年のコンタクト — スチュアート・ウィズダム (Stuart Wisdom) による手記』によれば、ライスリプのウェスト・ロンドンに暮らすウィズダム氏は同年4月、クリス・マーティン氏 (Chris Martin) らの「スカイウォッチ」に参加。そのときは何も出現しなかったけれど、「5月を通して」自宅の裏庭で熱心にスカイウォッチを行った結果、「非常な高空にいる球体たちを本当に3度見た。それらは日中、明るい星のように現れ、そこに5~10分間いて、去った」。6月23日には(「朝起き」てから、という文脈だが時刻不明)、マーティン氏「の自宅近くにある公園」で計4名にて「1時間半ほどスカイウォッチを行った」ところ、「子供のヘリウム風船」3つを発見。それらが或る雲を流れ過ぎるのを見守っていると「突然に、我々は、もう1つの風船だと我々が思うものに気づいた。だが、それは動いていなかった! 私は、急いで自分のビデオ・カメラを取って、この物体を撮り始めた。私はそれを、かろうじて2分弱撮影した。我々が画面を点検すると、1個の『古典的な球体 (classic sphere)』であることが明らかとなった」。ちなみに、ソニー製8ミリ・ビデオカメラ。マーティン氏の助言で、以後、発声と「テレパシー」による語りかけを、「スカイウォッチの前および最中に」実施する。7月12日「午後」、マーティン氏と「スカイウォッチ」中、「突然、私は、高空にある1個の球体に気づいた。それから、もう1個の球体がどこからともなく現れた。私は、2つ目の球体が、澄んだ青空からふっと消えるのを見た!」(マーティン氏も目撃したのか不明)。「だいたい10秒ぐらい」ビデオに収める。同23日、裏庭で「スカイウォッチ」中、「18時50分、私は突然、非常に明るい物体が自宅の真上にいるのに気づいた。私は録画スイッチを押し、物体が自宅から離れて行くのを追った」。「ヘリウム風船の束」かとも思われたけれど、「画面を点検した」ら「2度にわたり、この物体は1個の球形に変わった〔辞書に無い morph を metamorphose の略と仮定して翻訳〕ように見える」。「この目撃は4分間続いた」。7月29日「午後」。「いつものようにスカイウォッチをしていた」というから自宅の裏庭であろう。「私は最初、太陽を反射している飛行機を見つけたのだと思ったが、ビデオカメラをズームするや否や、もう1つの球体を捉えていることが判った〔飛行機ではなく球体だった、という意味?〕」。「当初、この球体は一定の速度でいくつもの雲を通過していたが、目撃しているうちに速度が落ちていった。私は、この球体の内部に地球外の知的存在 (ET intelligence) がいて、私が撮影していることを知っている、という印象をハッキリと得た。この場面で2回、私が『止まれ』と声に出して言うと球体が停止したように見える!」——2ページに及ぶ手記は、こうして8月の目撃の数々(「とても小さな物体たち」を「放出」する「長方形の」物体もビデオ撮影)へと続く。

*

■『Świat UFO』誌 (ポーランド) : ★天宮清氏を通じてその精力的な活動が日本にも知られている、ポーランドのロベルト・K・レシニャキェヴィチ氏 (Robert K. Lesniakiewicz) より、Bronislaw Rzepecki 氏と連名の4月25日付書簡が届く。日付と宛名だけ手書きされた、文面は言う。「私はあなたに、ポーランドのUFO学誌『Czas UFO』が、もう編集されていないことをお知らせいたします。UFO学の新しい隔月刊ニュース誌『Świat UFO』が、2002年7月から編集されるでしょう。…私はまた、あなたの雑誌の記事をポーランドで我々の雑誌に翻訳掲載する事を文書で許可して下さいようお願いいたします。…」以前 Lesniakiewicz 氏から1冊いただいた『Czas UFO』(2000年の号)は、A5判 (A4の半分) で本

文86ページの堂々たる印刷物だ。掲載された広告を見ると、ポーランドでは（少なくとも当時）『UFO FORUM』や『UFO』という雑誌も刊行されており、写真によれば、やはりコピー印刷以上の出版物らしい。新雑誌の編集長 Rzepecki 氏は、旧誌においても、名前の記載位置から推測すると同じだったのであろう。新雑誌が無事刊行されたことを、『THE UFO RESEARCHER』昨年No.2（8月）は伝える。

*

■UPRI（「アイルランドUFO超常研究」。アイルランド。本誌No.56参照）：
★季刊の『UPRIニューズレター』は、クリップで束ねた コピー印刷とおぼしき情報誌であるが、2002年第4号で36ページと毎号ぶ厚く、おびただしい新聞切り抜きが紙面のままの姿で収録されているのも楽しい。★同号にコピーされた11月11日付『デイリー・ミラー』紙の記事『月狂い（MOON MADNESS）』は、日本でもテレビが騒いでいた“アポロ月面着陸偽造説”を、「BBCで月面着陸の実況解説をした」「天文学者パトリック・ムーア」氏（セドリック・アリンガムの正体だとされる御仁であろう。本誌No.32参照）が1つ1つ反論して見せるという内容。例えば、私も息子（小学3年）に指摘したことだけれど、複数の照明ライトが使われているのなら、1つの物体から複数の影が伸びていなければならぬ。★カール・ナリイ氏（Carl Nally）とともにUPRIを設立したダーモット・バトラー氏（Dermot Butler）による同号記事『ダブリン空港のUFOに関する当局のコメント』は、空港付近で9月11日、発進したジェット旅客機の「機長が、1個のパラグライダーであると彼の信じるものを見つけた」と航空局が語った旨、『スター』紙が翌日報じた件の調査報告だ。管制塔では機長からただちに通報を受けたけれど何も発見できず、その空域にいた「1機の gardaヘリコプター」もまた通報を受けたが、やはり何も発見できなかった。この報道に、Butler 氏は「Garda（手元の辞書に無い。ゲール語か？ 2002年第3号に「Air Corps のパイロット」が前記ヘリコプターを飛ばしているとあるから、空軍の一部局らしい）本部」へ問い合わせたところ、「Aer Rianta」（意味不明）に尋ねられたしとの簡単極まる、かつ不適切な9月19日付の返書が届いた。よって Butler 氏はアイルランド航空局へ問い合わせ、9月23日付の回答を得る。それによれば目撃は「午後」（日没までを指す）のことで、ジェット機は「Aer Lingus」所属、物体は「彼の位置の南」。「管制官たちは、目撃されたという位置に、レーダーで何も見ることが出来ませんでした」と、「現場へ行くよう求められた」「Gardaヘリコプター」も、「言われているパラグライダーを見ることが出来ませんでした」。目撃に関する具体的なデータは以上でほぼ全てなのだが、UPRIは、同じ「午後」、「同空港付近の」「空に」「1つの輝かしい『星』」を目撃した男性がいることを知った。「星が見えるには早すぎる」ので何だろうと彼が考えていると、「物体は突然、空を横切って突進し、たちまち去って行った」。また、9月15日「夕」、Balbriggan に住む男性が家族と車で帰宅途中、自宅近くへ来たとき、何人かの若者たちが空を指して話しているのに気づいたので「見上げると、1個の白っぽい三角形の物体が遠方で舞っているのを認めた。太陽は沈んだばかりで空はかなり赤くなっており、あたりに雲は、あったにせよ極めて少なかった」。帰宅してから「1、2分以内に」また見ようと外へ出たら、もう物体の姿は無かった。

* * *

久しぶりに渋谷のタワーレコードで買った米国『UFOマガジン』12-1月（2003年）号掲載の広告によれば『円盤の来訪』が、「最初のラジオ放送（1947年、事件発生後わずか何時間かに録音された）」やアーノルド自身による目撃説明を収録したカセット・テープ付きで、復刊されている。また或る記事によれば、ミステリーサークル研究組織「CPRインターナショナル」は「2001年に解散した」由。

『レーダー捕捉UFO事例の研究』

An Excellent Book by Three Japanese: "A Study of Cases Where UFOs Were Captured by Radars" (Nov. 2000; ¥15,000! + tax)

◆既に『UFO I』No. 4 (昨年4月) が本書を、同じ出版元によるルッペルトの訳本とともに紹介していたが、あまりに高額なことと、インターネットによる連絡先しか記されていないなどから、私はいずれも買っていなかった。しかし今回『UFO information』の池田氏追悼号(12月)で、両書が「会員特別価格」により郵便でも申し込み出来ると知って早速送金したところ、いちばん安いインターネット価格で扱っていただいた次第。◆レイクンヒース事件(1956年8月)とワシントン事件(1952年7月)に関して(この順番で分析)、膨大な情報を収集整理し、懐疑派たちの主張をつぶさに論破して行く本書は、たとえ定価のままだったとしても買うに値する。とりわけ、私が米国の研究家に依頼しても得られなかった、ワシントン事件に対するポーデンとヴィッカーズの説明(ピーブルズ氏の訳本で初めて知った。本誌No.43、44参照)が、『附録12』として12ページにわたり原論文から翻訳されていることに驚く。しかもピーブルズ氏は、2人の研究が7月ではなく同年8月のワシントン事件に基づいていたことを、読者に断っていなかったのだ! ◆著者である桑原恭男(やすお)、玉置(たまき)紀夫、百田(ももた)克也、の3氏について私は何も知らない。UFOの背後にいる「地球外知性体」「不老不死の電算機の化け物」に成り果てている「可能性が高い」と著者らは見る(P.114)の動機をめぐる推理には同感しかねるけれど、そして、はるかに高度な人類(文明を出発させてからの時間が我々より長い、という意味で言っているのではない。生物として誕生した時点で我々よりはるかに恵まれているような人類を、私は空想しているのだ。運命とは、不公平なものだからである)の能力を我々の科学水準に基づいて云々する、というUFO研究の伝統的な罣から自由になっていない点が惜しまれるけれど、本書は、おそらく世界UFO研究史上においても1つの記念碑と言えるのではないだろうか。ちなみに本書は、マクドナルド博士(故ジェームズ・E・マクドナルド博士であろう)へ捧げられている。

『未確認飛行物体に関する報告』

E. J. Ruppelt Finally Gets His Book-Formed Japanese Version
(Mar. 2002; ¥10,000! + tax)

◆昔「空飛ぶ円盤ダイジェスト」が翻訳を連載していたけれど、未見の号が多く、完結したかどうか不明。今回こうして縦横に読めるようになり、“古典中の古典”であると実感。◆第1級の軍人・科学者たちが続々と目撃している状況の中では、今日の懐疑派に見られる如き野次馬的態度は、場違い以外の何物でもなかった。あのロバートソン査問会(1953年)が宇宙船説を採用しなかったのも、機器による証拠が欠けていたからにすぎず、委員たちは、それを得させるためブルーブックの強化を勧告さえした!(P.172) ◆UFOは、空中で飛行機に正面から急接近して来ることがよくある。しかし、仮にパイロットがUFOを避けなかったとしても、衝突することは無いのであろう。それを物語る実例(1951年)はP.69。◆マンテル事件に添えられた「空母・・・から放出されるスカイフック気球。その巨大さがわかる」の写真が、『日経』2月15日朝刊『私の履歴書』に。先般ノーベル賞を受賞した小柴昌俊氏による連載14回の同記事は、写真に「シャイン教授が指揮した気球実験」と付す。小柴氏は、1960年に急逝した教授の、後継者だったのだ(連載13回)。

久しぶりに見た光

My Newest Sighting: about 18:34, December 6, 2002; in Northern Cloudy Sky; from a Running Train near Kyodo Station, Setagaya-ku, Tokyo; like the Moon Covered with Clouds, But the Moon Had Already Set at 18:08; Duration of this Sighting Was about 3 Seconds in Total

★2001年8月6日(本誌No.56参照)の後、私は空中現象を久しく見ていなかった。見れば、記録をつけ検討しなければならないが、英文版の作成や勤務先の配転などでそんな余裕は無かった。★新しい業務にも慣れつつある12月6日(金曜)。帰宅途中、豪徳寺(ごうとくじ)駅を発した小田急(おだきゅう)線が経堂(きょうどう)駅に近づいていたとき、進行方向を向いて右側にあるドアのかたわらにいた私は、窓ガラスのかなたの曇り空に円っこい光を見つけた。“雲の背後にある月”の如き外観だ。正面、仰角ゼロぐらいの位置であるが、線路は高架なので、物体は地平から、かなり離れている。方角は、ほぼ真北。★次に見た(なぜ目撃が中断したのか、メモ無し。建物により、視界が遮られたのであろう。経堂駅のあたりはビル多し)とき物体は、“右に45度ほど傾いた楕円形”のような形になっていた。やはりメモしてないけれど、すぐ視界が遮られたはず。経堂駅に着いてから腕時計を見ると、午後6時34分。発車して視界が開けた6時37分頃には、もう姿は無かった。見かけの大きさは、腕を伸ばして眺めた“小指のツメ”ぐらいか。月は午後6時8分に既に没している(『天文年鑑』)。観察時間は計3秒ほど。

アダムズ山上の母船雲について

Notes about the “Cloud” over Mt. Adams (USA) Videoed and Photoed by Mr. Kiyoshi Amamiya on June 22, 2002 (See My English 3rd Issue); the “Cloud” Was Formed within about 4 Seconds

★『THE UFO RESEARCHER』昨年No.2(8月)に掲載された写真を見て私は、大きく異なる方向から撮られた2枚において、物体が、同じように山頂の上方にあることに気づいた。これは、文字どおり山頂の真上にいることを意味する。この件を天宮氏へ御報告したところ、物体のカラー写真4枚が送られて来た。英文版No.3(9月)に掲載したのは、その1枚を複写してトリミングしたものだ。★UFO側の立場になってみよう。何を見せれば、“雲ではあり得ない”ことが地球の一般人、つまり雲に関してごく基本的な知識(“空気が冷えることにより発生する”とか、“山岳の付近では気流が乱れている”とか)しか持たぬ、私のような人種にとって理解できるだろうか? もしも物体が、移動する撮影者の方を常に向いているとしたら、雲である可能性は極めて小さくなる。4枚の写真を見ると、皆アーチ形をしているのかも知れない。“大きく異なる方向から見てもアーチ形に見えるような立体”とは、どんな姿なのか想像できぬ。ただ、アーチ形と断定して良いか否か微妙である。★この件を1月末に天宮氏へ御報告したところ、ビデオをお送りいただく。問題のカット(途切れない映像のこと)は、アダムズ山がズームで拡大されてゆくところから始まる。約5秒後にズームが終わり、それから約8秒後に物体がうっすらと現れ始める。ほぼ同じ大きさのまま濃くなってゆき、4秒ほど後、次のカットへ移る頃ハッキリした姿となる。この大きさの雲が、この秒数で形成され得るのか否か、私の知識では不明。